

【実践報告】

教職実践演習（小）の概要と課題Ⅸ（2021年度）

広島文教大学教育学部教育学科

教授 今崎 浩 教授 岡 利道 教授 佐伯 育郎
教授 笹原 豊造 准教授 三田 幸司 准教授 庄 ゆかり
准教授 白石 崇人 教授 杉山 浩之 教授 村上 典章

はじめに

本年度は「教職実践演習」が開講されて9年目であった。教員養成の最終段階として実践的能力の養成の仕上げをする位置づけとなる本科目では、今年度も昨年度に引き続き、新型コロナウイルス感染症の拡大により例年実施していたボランティア活動および学校教育関係の研究会への参加を割愛した。よって、①本科目に相応しいオムニバスによる15回の授業と、②事前事後学修(指導案や研究レポート等)を内容としてプログラムを編成した。さらに、学校におけるオンライン授業の知識と技術が将来は必要になるという考えから、昨年度と同様に、学生がオンラインで模擬授業を計画・実施するという企画に取り組んだ。以下、授業内容の概要と課題等を報告する。

1 授業のねらいと概要

教育実践演習は「教職課程の履修の全体を通じて身に付けるべき資質能力を最終的に形成し、その確認を行うための総合実践」として位置づけられる。この演習では、「教員として求められる4つの事項(①使命感や責任感、教育的愛情等に関する事項②社会性や対人関係能力に関する事項③幼児児童生徒理解に関する事項④教科等の指導力に関する事項)」について研修を深めることを目的とする。この目的を達成するために、「演習(指導案の作成や模擬授業・ロールプレイングの実施等)や事例研究、グループ討議等を適切に組み合わせて実施することや、教職経験者を含めた複数の教員の協力方式により実施すること」などが求められている。この演習では、上記以外にICT技術の向上を目的として、ICTに関する基礎的知識・技術を習得するために充てる。評価については、多角的な角度から評価を行い、学校現場の視点などを加味して総合的に教員としての資質・能力を評価する。

2 授業日程(2021年度)

| 回 | 月日(火) | 担当教員 | テーマ(内容) |
|---|-------|------|-----------------------------|
| 1 | 9.28 | 杉山 | オリエンテーション(履修カルテ確認と学習課題の作成) |
| 2 | 10.5 | 古田 | 特別支援教育Ⅰ |
| 3 | 10.12 | 古田 | 特別支援教育Ⅱ |
| 4 | 10.19 | 佐伯 | アクティブ・ラーニング～図工科の鑑賞領域を中心にして～ |

| | | | |
|----|-------|-------|---------------------------------|
| 5 | 10.26 | 庄 | オンライン授業のポイントと指導案作成 |
| 6 | 11. 2 | 岡 | 国語科（古文）の実践と評価方法 |
| 7 | 11. 9 | 三田 | プログラミング学習（理科） |
| 8 | 11.16 | 白石 | 道徳教育に関する事例研究 |
| 9 | 11.30 | 笹原 | 外国語活動の授業づくり |
| 10 | 12. 7 | 今崎 | 授業開き～算数科を例に～ |
| 11 | 12.14 | 庄 | オンライン模擬授業の実践（非対面授業，6グループ45分×2回） |
| 12 | 12.21 | 庄・杉山他 | オンライン模擬授業の振り返り発表，新型コロナウイルスと学校教育 |
| 13 | 1.11 | 今崎 | 学修評価の実際 |
| 14 | 1.18 | 村上 | 保護者・地域対応 |
| 15 | 1.25 | 全員 | まとめ～授業を振り返る～ |

3 授業の概要と課題

第1回「オリエンテーション」

本科目の趣旨と授業全体の進め方を説明した。さらに、学生たちは履修カルテ確認と本授業での学修課題の作成（資料1参照）を行った。

第2・3回「特別支援教育ⅠⅡ」

特別講師の古田寿子先生をお招きし、発達障害を持つ子どもの教育方法を中心に具体的で実践的な内容を学修した。「障害者の権利に関する条約」（2006）が日本において批准され（2014）、インクルーシブ教育が推進されている。中教審答申（2012）「共生社会の形成に向けてインクルーシブ教育構築のための特別支援教育の推進」において「合理的配慮」の定義がなされた。合理的配慮とは「障害のある子どもが他の子どもと平等に教育を受ける権利を享受・行使することを確保するために、学校の設置者および学校が必要かつ適切な変更・調節を行うことであり、障害のある子どもに対し、その状況に応じて学校教育を受ける場合に個別に必要とされるものであり、学校の設置者および学校に対して体制面、財政面において均衡を逸した又は過重の負担を課さないもの」とした。合理的配慮の決定は、「一人ひとりの障害の状態や教育的ニーズ等に応じて決定されるもので、興味・関心、学習上または生活上の困難、健康状態の実態把握を行い、可能な限り合意形成を図った上で」行われる。

（担当：杉山）

第4回「アクティブラーニング～図画工作科の鑑賞領域を例にして～」

1.じっくりみよう！みんなで考えよう！

本授業では、まず5～6人程度の小集団に分かれて美術鑑賞のグループワークを行った。スクリーンに提示した作品についてグループで考え、話し合い、気づきをワークシートに記入した。

2. みんなで発表・交流をしよう！

その後、グループ別の発表を通して、感じたこと、考えたことを交流した。代表者が1～2人ずつ教室の前に出て、スクリーンに提示した作品を指し棒で示しながら、グループで話し合った内容を発表し、交流した。

3. アクティブラーニングって何？

次に、アクティブラーニングの基本的な考え方について確認した。文部科学省による記述や研究者の見解を提示し、再確認した。

4. アクティブラーニングの方法と効果

アクティブラーニング型学習の一例を示し、アクティブラーニングの効果について再確認した。

5. 作品の裏側をのぞいてみよう！

1・2で行った鑑賞で取り上げた2つの作品についてのデータを明らかにした。作者のプロフィール、作品に使われた素材、作品の題名、作品が生まれた背景などについて紹介した。その後、作品の実際を知った時点での感想・意見を交流した。

6. おわりに

授業のまとめを行った後、最後に担当者からメッセージを伝え、終了した。

授業後、Glexaを用いて本授業を4段階で評価させ、コメントを記述させた（受講者76人中76人の回答。100%の回答率）。4段階評価は、Very goodが回答者の78%（昨年度から23%増加）、Goodが21%（昨年度から11%減少）、Badが0%（昨年度と同）、Very badが0%（昨年度から11%減少）、無回答が1%（昨年度から1%増加）という結果となった。新型コロナウイルスの感染状況が落ち着いていた時期であったため、換気を行いながら対面で行った。4年次後期に実施された中学校での教育実習で参加できなかった学生のために、1月27日にMicrosoft Teamsを用いて補講を行った。オンラインではあったが、学生が3人であったため、美的鑑賞と知的鑑賞の往還を、余裕を持って行うことができた。

学生の感想には、例えば「私たちのグループが考えたことや感じたことは作者の想いに近いものだったり、全く違うものだったりしていましたが、考えを深めた後に作者の作品の意図・想いを知ることによって、より作品をじっくり見返すことができました。最初から作品の意図等を知ってから作品を見ると、作品をじっくり見ず、考えを深めることができないと感じました。また、グループで考えることにより、1人で考えるときには気付かない点にも気付かされるなど新たな発見があったので、グループ活動が効果的だと実感しました。よって、1つの作品でも色々な見方や感じ方があることを体験的に学ぶことができました。」というものがあつた。批判的なものは少なく、肯定的な感想が多かった。作品についての情報をあらかじめ与えなくても、グループワークによる美的鑑賞を通して作品の本質や作者の意図に迫ることができており、学生の感性の豊かさ、着眼点の鋭さに改めて感心した。

Glexaの設問「近い将来、あなたが授業者になった時、図画工作科でアクティブな鑑賞の授業を実践したいですか。」には、実践したいが99%、実践したくないが1%という結果となった。課題・反省点を次年度に生かし、内容を充実させていきたいと考える。（担当：佐伯）

第5回「オンライン授業のポイントと指導案作成」

「教職実践演習（小学校）」では、昨年度に引き続き、その3回でオンライン模擬授業の実践を行った。日程・内容は以下のとおりである。

1回目 第5回（2021.10.26） オンライン模擬授業のポイントと指導案作成

2回目 第11回（2021.12.14） オンライン模擬授業の実践

3回目 第12回（2021.12.21） 前半：振り返り発表とフィードバック

後半：講義「新型コロナウイルスと学校教育」

1回目である授業第5回には、まずオンライン授業の種類を同時双方向型・オンデマンド型・混合型の3種類に分類してその特徴を整理した後、オンラインでの学習について長所・短所を検討し、これまでに特に初等教育での実践が進まなかった理由について考察した。それらの理由のほとんどはICTの活用及び環境の整備により解決できるものであり、今後は感染症対策としてではなく、多方面で活用が図られることが予想できる。当授業におけるオンライン模擬授業の実践では、今後の教育活動においてオンライン授業がひとつの教育方法としてとりあげられるべきものであることを念頭に、オンラインでは取り組みにくい教科・単元に挑戦し、仲間とともに課題や対策を検討してほしいことを説明した。

学生が取り組むのは同時双方向型のオンライン模擬授業である。ICTの積極的な活用により授業者と学習者のコミュニケーションをはかり、効果の高い授業を目指すという目標を設定した後、各グループに分かれて役割分担を行い、準備作業を開始した。オンライン模擬授業では実践前の準備・練習にかかる時間が授業の質に、また学生の学びの質にかかわる。昨年度は、初回準備期間と年末年始の休暇や卒業論文提出などが重なり、十分な準備期間は日程的に難しい条件であったことが学びに負の影響を与えたので、今年度は実践を繰り上げ、年内に終わるよう計画した。(担当：庄)

第6回 国語科(古文)の実践と評価方法

テーマは、「国語科(古文)の実践と評価方法」であった。事前に「大分県教育庁チャンネル」で、「6年国語・春はあけぼの」の授業を視聴してもらった。当日は、テキスト(オンライン資料)をもとに、授業の学習指導案、「春はあけぼの」の教材文、板書計画図、授業記録(プロトコル)等を確認ののち、確かな評価について検討を進めた。事後レポートは、「国語科の授業における評価で、これから自分自身が留意していきたいことを述べよ。その時、国語科授業の①事前・②事中・③事後の段階それぞれに対応させて書くこと。」とした。レクチャーの面でスライドを工夫してポイントは伝えられたと思うが、昨今の事情からグループディスカッションに十分な時間が取れなかったことが反省点である。(担当：岡)

第7回「プログラミング学習(理科)」

事前に、文部科学省検定済の小学校理科の教科書6社分のうち、どれを学びたいかを調査するとともに、それらの教科書の内容を、使用する実験器具別に分類し、受講する学生を三つの教室に振り分けた。また、学生全員が実験器具や操作用タブレット端末を操作できるようにするために、各4名以内の少人数グループを構成しておいた。

当日は、まず小学校学習指導要領(平成29年告示)解説理科編の記述から、小学校理科におけるプログラミング学習ではどのような内容を扱うのかを説明した。また、「プログラミング的思考」や「論理的思考力」等について解説するとともに、これまでの理科授業でめざしてきたこととプログラミング学習が導入されるねらいの関係について説明した。続く演習においては、理科専修の4年生10名がプログラミング学習用の実験器具についてすでに学び始めていたことから、この10名に指導を行わせた。まず、アプリケーションソフトのダウンロードとインストールや、タブレット端末と実験器具のペアリング等の事前準備から演習を始めた。その後は、指導者側から一つひとつ操作を指示するのではなく、プログラムによってめざす実験器具の動作と必要最小限のコマンド等だけを伝えたことで、グループごとに学生全員が主体的に考えを出して試行錯誤しながら学び合う姿が見られた。授業後には、理科専修の学生から『授業づくりの難しさを改めて感じた』との感想が聞かれた。(担当：三田)

第8回「道徳教育に関する事例研究」

本時のねらいは、「考え議論する道徳授業」を実現する方法を考えることであった。活動は大きく3つ用意した。第1に、低学年用教材「かぼちゃのつる」と中学年用教材「大切なものは何ですか」について、教材研究と授業展開のポイントについての解説を行った。第2に、文部科学省「道徳教育アーカイブ」掲載の授業映像「おじいさんのこんにちは」(小学校第4学年)について検討した。授業映像「おじいさんのこんにちは」は、対面式一斉教授やお話教材の主人公の心情読み取りに終始せず、机のコの字型配置やグループ活動、ロールプレイングを取り入れた実践である。道徳授業における言語活動・体験活動の重要性は近年とくに主張される場所であるので、本事例によって言語活動・体験活動に基づく主体的・対話的で主体的な学びの実践の好例を学ぶことには意義があった。活動は、動画を自分で気づいたことをメモしながら視聴し、続いてグループで情報交換して気づきを共有・議論した。第3には、岩手県立総合教育センターHP「学習指導案情報」掲載の指導案「きいろいベンチ」(小学

校第2学年)について検討した。指導案「きいろいベンチ」は、特に総合単元的道徳教育の観点から計画されている部分に注目させた。学校教育全体における道徳教育については戦後主張され始めて長い歴史があるが、その実例を学ぶ機会は少ない。そのため、本事例を通して道徳科だけに限らずに学校の教育活動全体における道徳教育をどう計画できるかを学ぶことは、意義のあることである。活動は、指導案のとくに総合単元的道徳教育による計画部分を検討した。(担当：白石)

第9回「外国語活動の授業づくり」

小学校教員に一層の英語指導力が求められつつある。特に、新卒教員は、即戦力として期待されている。これらを前提に、1. 小学校英語教育の目標、2. 現在に至るまでの経緯、3. 指導に必要な最低限の知識・技能、4. 今後の指導力向上のための方向性、これら4点について確認した。最後に、現時点での各自の英語指導力について、簡単なアンケートを行った。その中で、「英語指導に自信がある」と答えた学生は10%程度であった。

アンケートが示唆することは、現場での多忙さの中であっても、継続して研修を積み重ねていく必要性であろう。今後の研修に役立つであろう、勉強法、各種講座、各種テキストを紹介した。

(担当：笹原)

第10回「授業開き～算数科を例に～」

算数科の授業づくりでは、算数科の授業の1時間目、いわゆる授業開きにおいてどのような内容を取り扱うか、また、それらをどのように進めていくかについて演習・協議を行った。具体的な内容としては、めざす授業像の提示、教科用図書の方法の指導、ノート指導の進め方の指導を取り上げた。めざす授業像の提示については、担当教員が第5学年の内容で模擬授業を行った。実際に授業を体験することを通して、教師自身がめざす算数科の授業像を児童に具体的に伝えていくことの重要性について理解を図った。

教科書の活用方法の指導については、どのような教科書を活用方法があるかを協議し、学習意欲の喚起、学習課題の提示、学習方法の提示、学習の個性化・個別化、学習の定着等、多様な活用方法が考えられ、効果的に活用していくことが必要であると整理した。今後はデジタル教科書が導入されていくことから、その活用方法について研修を積んでおく必要性に伝えた。

ノート指導については、まずは教師が目指すノートの具体を示すこと、次に継続的に評価を行っていくために教師による評価だけでなく、児童同士の相互評価、自己評価を適切に行っていくことについて、実際のノートや指導資料を示しながら解説した。また、ノートは学習評価を行う際の有効な手立ての一つであること、そのために留意しなければならないことについて具体的な事例を挙げながら解説した。

事後学修では、めざす算数科の授業像を伝えていくための活動を構想することを課題とした。学生が構想した活動はおおむね満足できる状況であった。

(担当：今崎)

第11回「オンライン模擬授業の実践（非対面授業）」

12グループに分かれ、それぞれの指導案に基づいて、Microsoft Teamsによる同時双方向型のオンライン模擬授業を実践した。前半40分は奇数グループの指導案に基づく授業を展開し偶数グループは児童役として参加、後半は役割を交替してすべてのグループが教師と児童の両方を体験した。各グループに教員を1名ずつ割り当て、模擬授業終了後にコメントを投稿した。

昨年度の反省に基づき、休暇前に終了するよう実践日程を練り上げた結果、ほとんどのグループが話し合いを重ね、練習をして当日に臨んだようである。昨年度と比較すると、T2や機器操作の補助者等を配置するなど複数による授業進行が多かったのは、事前の調整ができたからではないと思われる。

模擬授業終了後は、グループごとに振り返りを行い発表用スライドの作成に取り組んだ。

(担当：庄他)

第12回「オンライン模擬授業の振り返り発表、新型コロナウイルスと学校教育」

前半は、グループごとに実践した模擬授業について、振り返りの発表を行った。質疑や意見交換の時間が取れなかったため、各グループの振り返り発表についてフィードバックを事後学修として提出してもらい、提出されたフィードバックはグループごとにまとめてGlexaで公開した。また、各自がオンライン模擬授業への取り組みについて振り返り、一人一人の学びをまとめるレポート提出を課した。レポートには、グループでの取り組みやオンラインでの授業実践に関しての学びが多く記載され、準備から振り返りまでの時間が有意義なものであったことが感じられた。

一方で、第15回の授業終了までにGlexaに公開したフィードバック資料を読んだ（資料のダウンロードを行った）学生は半数以下であった。資料公開が教員への卒論提出の直後かつ冬期休業の直前であったために、終了時点での自分の思い・考えをレポートとしてまとめていくことが、そこからさらに学びを深めることより優先されたのかもしれない。フィードバックが有効に活用され、さらなる学びの機会となるようにすることが、今後の課題である。（担当：庄）

オンライン授業の振り返りを聞いて、以下のコメントを話した。

① 発表の「話し方」に課題のあるグループがあったこと、（皆で作成した資料を「自信をもって」報告しよう！） ② 意味の分かりにくい文章表現があった。（ロイロノートを使う時間が少なく、小学生には足りないと思う） ③ 教材について詳しい説明を加えていた点。 ④ 教科横断の授業というチャレンジ、そして成果があったこと。 ⑤ 成果と課題・改善点を、項目を分類して小見出しを付けて分かりやすい工夫をしていたこと。 ⑥ 結論を理由を示しながら説明したことで分かりやすい報告であった。レジュメ（要旨、要約）の棒読みはNGであった。 ⑦ 全体の発表を聞くことで、学年により、教科により、学習活動により、オンライン授業での工夫が多様であることが必要であった。

⑧ 対面授業の良さが改めて認識できたこと。オンライン授業は限界があるが、必要な場面では使用するの、備えておく必要があること。まとめとして、人間の多様化に応える多様な教育方法の開発例えば、特別支援教育（古田先生の授業）。発達障害などを持つ児童・生徒のニーズの多様性に配慮するユニバーサル・デザインの教育方法や教材の工夫。コロナ禍で居酒屋がフルーツサンドのお店に、料理教室の運営をするなど、環境の変化に応じた多様な変化をすることによって、持続可能性を高める（進化により生き延びる）。学校も時代の変化に、子どもたちの変化に多様性をもって変化しなければ、他の教育機関（オールタナティブ）に取って代わる。オンライン授業の中での創造的な工夫が、対面授業にも変化をもたらす。新たな学びとともに変わり続けることが成功への秘訣である。

（担当：杉山）

第13回「学習評価」

学習評価については、平成29年に告示された小学校学習指導要領に基づいた評価について取り扱った。主たるテキストとして『『指導と評価の一体化』のための学習評価に関する参考資料』（国立教育政策研究所、2020）を用いた。

内容について、新学習指導要領に基づく学習評価と、これまでの学習評価との違いについて確認した。

次に、評価規準・評価方法等の意味とそれらの設定の仕方について、教育方法学、各教科教育法等の学修内容を確認した後、算数科第5学年「図形の角」の中の1時間を取り上げ、評価規準、評価時期・評価方法、B規準を満たす評価基準（児童の具体的な反応も含む）を設定する活動を行った。それらをグループ内で交流することによって、多様な評価方法（パフォーマンス評価、テストの活用等）、評価規準に沿った評価方法の在り方について理解を深めるとともに、担当教員からは継続して行うことができる評価事例について紹介した。さらに、観点別学習状況の評価の総括の仕方（評定の仕方）について、テキストに掲載された実践を例に解説をした。

事後学修では、教材とあらかじめ設定した本時の目標に沿って、評価規準Bと判断できる児童の反

応例の作成を事後学修課題とした。学生は提示された本時の目標の意味について十分に理解できておらず、作成した児童の反応例は十分満足できる状況にはなかった。そこで、本授業の最終回において、適切な評価規準や児童の反応例を設定する方法について指導を行った。(担当：今崎)

第14回「保護者・地域対応～ロールプレイング・事例研究～」

本講義のねらいは、保護者や地域住民からの多様な意見、要望や苦情に対応する際の基本的な考え方や内容を理解し、具体的事例について意見交換しながら実践力を高めることであった。今年度は、まず対応が難しい要因としてネット世代の若者（デジタルネイティブ）のコミュニケーションの特徴も含めて対応の課題を示した。次に、適切な対応として、「①事実を基に対応する。②誠意をもって対応する。③法的な根拠を踏まえて対応する。④組織的に対応する。」という基本的な考え方を説明した。さらに、対応の基本的な流れを説明した後、オンラインで教師と保護者のロールプレイングを行った。また、講義後に多様なケースを想定して保護者や地域住民の要望や苦情に対する対応の構想案作成を課題とした。

成果としては、明確な説明の必要性から法的な根拠を踏まえて対応することや組織的に対応することの重要性を理解した学生が多かった。また、事後課題も含めて、対応の流れや伝えるべき内容についてはほぼ理解することができていた。

しかし、対面でのロールプレイングができなかったため、時に対立を含む関係の中で即時対応を求められる緊張感を体感することができなかった。また、新型コロナウイルス感染拡大のため、対人コミュニケーションのスキルを身に付ける機会が大きく減少しているため、今後、意識して自主的にロールプレイング等を行い、スキルアップしていくよう指導した。(担当：村上)

第15回「まとめ～授業を振り返る～」

最後の授業として、一人ひとりの授業担当者から受講者に授業のねらいのエッセンス的な内容が紹介された。まとめ役として以下の点を話した。ある学生の学修記録を最後に紹介している。

4年間の学修、そして学生生活はどうでしたか。教職に繋がる様々な授業での学修を積み重ねて、知識や技能、教職の魅力、難しさなど簡単には言えない複雑で深い学びをしてきたと思います。一人ひとりの個性的な歩みや経験を通じて。今後それぞれの道で与えられた環境の中、自分の経験と実践力を最大限に出せるように、自分らしく頑張ってください。一人ひとりに相応しいタイミング（時）があるはず。進化や変化がなければ、時代から取り残されていくということです。やりっぱなしではなく振り返りをしましょう。学生時代は、過去の学問の成果を学修したのであって、その中には不易（変わらないもの）と流行（変わるもの）があるので、取捨選択して、常に知識技能を更新して行きましょう。寄らば大樹ではなく、鶏口となるも牛後になるなかれの精神で。真実は、自ら経験してこそ得られるものです。自分の経験を信じて進んでいこう。ただし、「学ばざれば則ち罔（くら）し、思わざれば則ち殆（あやう）し」ということもお忘れなく。一つの考え方に拘泥せず、多様なものの考え方に出会い、多様な手段・方法を持ち、生きて行こう。出過ぎた杭は打たれない(社会常識の範囲において)。(担当：杉山)



後期は対面授業としてスタートしたが、1月以降は昨年度同様にオンライン授業となった。初等教育学科の最後の学生である38期生は、入学後の2年終了までは日常的な学修活動が行われてきた。2年次は児童教育コースの観察実習、野外活動などアクティブラーニングが存分に行われてきた。大学

においても、日常的ということがどれほど恵まれているのかということ気付かされたこの二年間であった。オミクロンの感染拡大が進行している1月から2月に卒業研究発表会を行い、本原稿を執筆している最中においては卒業式がどうなるかは分からない。38期生は、4年間のうち、日常的な学修を積み重ねた期間と、非日常的な期間とが半分ずつの大学生活を送ったが、この2年間の経験を卒業後に歩むそれぞれの道で行かされることを願っている。

資料1 第1回の学修記録から

第1回 私は大学に入学し、初めの頃は小学校教員になることしか考えていなかった。しかし、SALCという施設で英語に触れる機会があったり、小学校でも英語が教科化されるということを知ったりする中で、中学校英語の教員免許を取り英語教育についても学ぼうと考え、結果、小学校教諭、中学校英語教諭、幼稚園教諭、司書教諭の免許と4つの免許を取得見込みとなっている。この4つの免許をとるためにこれまでたくさんの授業を受けてきたが、1年次では各教科の概論や教育に関する基礎的・基本的な知識を取り込むことができた。1年の学習から振り返る。国語概論の授業では、日常的によく使う似たような言葉の違いをグループごとに割り当てられ、さまざまな本や資料を用いてなんとか違いを見つけたり使い方のきまりを見つけ出すためにグループのメンバーと一緒に必死に取り組むことができた。必死になって取り組んだことではあるが、1年の時のことなのでしっかり内容まで記憶できていない。今後は振り返る時間も取って、自分の知識としてきちんと生かしていけるようにしたい。体育では、小学校で取り組む内容をほぼ全て取り組み、久しぶりに鉄棒に取り組むと、逆上がりができなくなっていたことが自分の中での衝撃だった。少し悔しさもあり、帰省した際には今でも小学校の鉄棒で練習しているが、逆上がりはなかなかできない。これからも継続していきたい。音楽ではこれまでまったく取り組んだことのなかったピアノに苦戦した。しかし、この音楽の時間に加えて音楽棟のピアノの部屋で地道に練習を重ねたことで、自分も練習すればそれなりにピアノを弾くことができるということに気づくことができた。なので、すぐには弾けないけれど練習して実際に子どもたちの前で音楽の授業をする時に少しでも自分で演奏できるように今後も努力していきたいと考える。2年次には、各教科の教育法について学び、指導案の作成に取り組むことができた。この頃の指導案作成は本当に時間がかかったり、内容がまだまだな点が多かったりしたが、この時の頑張りや努力が基礎となって今指導案を書くときはこの頃よりスムーズに考えることや工夫を詰め込んでいると考える。5日間の観察実習では、実際に子どもたちの様子をみたり、先生方の授業を見させていただいたことで、自分が先生になるために学習していふことにより実感を持つことができた。3年次には、4週間の小学校実習を通して大学では学びきれない、より深い実際の経験を通して、学びを得ることができた。また、前期は全てオンラインでの学習だったこともあり、オンラインの授業を経験することもできた。生徒指導についてや教育相談など、教師は授業をすることだけが仕事ではないことも意識することができた。実際の現場に出た際にも活用することができるようまた振り返りきちんと身につけた状態にしておけるよう意識して残りの大学生活も過ごしたい。4年次前期には、中学校実習にも行かせていただき、小中の連携の部分の課題や、小学生とはまた違った中学生との関わり方についても考えることができ、とてもいい経験をすることができた。この経験を活かして、小学校教員として頑張っていきたいと考える。以上、学んできたことを学びっぱなしにするのではなく定期的に振り返ってきちんと自分のものにしていくことが大切だと改めて考えることができた。(以上)